

会員のば

平成30年北海道胆振東部地震

苫小牧市医師会
あつまクリニック

小林 孝

9月6日早朝、「平成30年北海道胆振東部地震」が発生しました。厚真町を震源とした地震とブラックアウトは、既にテレビ等でご承知のことと思います。当町の被害が甚大であることは全国に知れ渡り、多くの友人・知人よりお見舞い、激励のお言葉を頂戴いたしました。

当院は市街地にあります。市街地と言いましても、小範囲ですが、壊滅的な被害を受けずに済み、当日より応急処置などの診療を開始できました。当院長宅は大きく傾き、スタッフの住宅も使用不可能という人もおりました。外傷を受けたスタッフもおりました。こうした中で、院長を先頭に、地震当日明るくなってから診療に当たりました。軽症、重症の患者さんは初日40名ほどでした。検死の方もおりました。

各方面の人たちより支援、激励、お見舞いをいただきました。震災当日、いち早く苫小牧市医師会、北海道医師会、病院協会より全面協力のお声をいただきました。この場をお借りし、厚くお礼申し上げます。当日、臨時の電源を町の建設会社が設置してくれ、院内の照明は取り戻しましたが、通常通りの診療になったのは電源が回復した8日（土）になってからでした。DMATの方が、早急に必要なのがないかと、訪れていただきました。ご尽力のおかげもあるかと思いますが、曲がって自由にならなかったレントゲン装置は、震災発生5日目に完全復旧しました。DMATとの連携・情報交換も行ないました。東北地方から医療救済車両も多数来ております。

厚真町市街地を取り巻くように激甚被害地が広範囲に及んでおります。厚真に入る4本のルートのうち安平（早来）－厚真間、鶴川－厚真間、穂別－厚真間の3本は完全に遮断されました。唯一、苫小牧－厚真間のみが交通可能ルートとなっております。救急車・自衛隊・警察・DMAT・日赤車両が陸路だけではなく、空路ヘリコプターでのアプローチも多くなされました。孤立した地区（吉野・豊里・幌

内・高岳）で被災された人たちも搬送されました。当町で機能している施設に避難され、今なお避難生活を送っています。長期間になることが危惧されます。保健師による健康チェック、ボランティアによる食事や身の回りのお世話が行なわれております。

厚真町は高齢化率が高く、要支援・要介護の人が多く住まっています。当町にある特別養護老人ホーム・リハビリテーション施設（入所者計120名、スタッフ約100名）では、駐車場が大きく崩れ落ち、増築された建物も分断されたとのこと。入所者に被害がなく、ヘリコプター搬送もされました。その後、新得、伊達、室蘭、札幌、穂別など他施設に分散搬送され、新たな生活となりました。当施設の早期の再興が望まれるところですが、長期間を必要とするようです。生活支援が必要の方も多くいて、苫小牧、千歳、札幌、岩見沢に居住しているご子息・親類の方が一時避難に迎えに来ておりました。しかしながら、札幌に一時避難された方の悲報が札幌白石警察署からもたらされました。合掌。今後災害関連による被害が広がりませんことを願うばかりです。

当町で復旧に頑張っている人の中には、家財道具が倒れていて、薬のあった場所が分からなくなって、来院された方もおります。震災後2～3日経って、緊張が少し和らいだのか、アチコチの痛み気付いて来院。打撲・皮下血腫、肋骨骨折、創傷などさまざまです。孤立した地区に住まいして、ヘリコプターで搬送され、避難生活を送っている人の多くは、知人・友人・患者さんです。避難場所を回ってみましたら、酒好きの友人が声を掛けてきました。「なんだ、センセイ、酒持ってきたのでないのか」。周囲の人がどっと来ます。自宅の両側に土砂が来て、身動きできなくなっているiPhoneの写真を見せてくれました。「酒飲んだらシヨンベンしたくなるぞ、水道来てないのだから」とやり返しておきました。同じ地区の人で元町議会議長さんも同じ避難場所におりました。あと2mのところまで土砂が押し寄せたとのことでした。奥さんは「今まで私の家が一番散らかっていたけど、きれい好きの人の家も一緒になった」と苦笑いを浮かべ、気持ちの切れるのをなんとか抑えようとしておりました。

この文章を作っている時も、ドンと来て、「おお、地震だ」と声が出ました。スタッフが「どうしました」と顔を見せました。私の声の方が大きくて驚いたようです。震度3でした。震度3～4くらいは慣れっこになったのでしょうか。

厚真町は明治以降本州からの入居者が多く、地区ごとに同郷者の方が多いようです。過疎が進行し仲間が減少しておりますが、避難場所でお互いの無事を確かめ合っております。

一日も早い水道の復旧が待たれます。再出発の第一歩です。

2018・9・12（水）